その他

臨床における指導のポイント

Points of Instruction at Bedside

鈴木久美子
SUZUKI Kumiko

佐藤学[1]は「学」という字の成り立ちについて興味深い説明をしている。「学」の旧字体「學」という字の上部中心にある2つの「メ」はそれぞれ「交わり」を意味し，上部の「メ」は学問や芸術・文化との交わりを，下の「メ」は仲間同士の交わりを意味する。すなわち「交わり」のないところでは学びは成立しない。さらに上部の両側にある「E」と「ヨ」は子どもの交わりをケアし導いている教師(大人)の手を意味している。子どもの交わりに心を砕く教師(大人)がいないところでは，学びは成立しない。そして，学ぶ主体としての子どもは，建物を意味する「冖」の中心に位置している。

つまり，学びとは一人で孤立して行うことでなく，人と人の関わりの中で進むものであること，学びを援助する教師や指導者が必要なことを意味している。もう社会人だから，プロの看護師になったのだからと急に自律した学びを求めるのではなく，人間関係の中でしかも自分の学びを支援してくれる人がいると感じられる環境の中でこそ，新しい知識や技術は身についていくことを示唆している。人と人との信頼関係の上に成り立つ看護という仕事は，まず職場になじみ，職場のメンバーから仲間の一員として認められることから始まる。認められると，職場内での課題に貢献できるようになり，新たな知識や技術を身につけようとする前向きな行動が見られるようになる。

ところで，指導する看護師は限られた時間と労力の中で，自分の日常業務もこなしながらの指導であるため，指導することによい印象を持っている人は少ないと思う。しかし，実際はもっと相手の話をじっくり聴き，一緒に患者さんのケアに関わり，丁寧に指導したいと思っている。

そこで，明日を担う新人看護師が一人前の専門職として育つために，どのような指導をしてほしいか，指導者になってほしいかをまとめてみた。少しでも今後の指導に役立てていただければ幸いである。

受理日：2007年5月28日
山梨大学医学部附属病院看護部：University of yamanashi Hospital Nursing Department

Ⅰ．相手を大切にして指導する

人は大切にされているかいないかを察知する能力があり，大切にされている相手からの話は良く聴くし，頑張ろうという意欲にもつながると思う。意欲を持たせることは，指導をする上で重要なことであり，やる気がなければ何も始まらない。そのことを例えて「馬を水のみ場まで連れて行っても，水を飲ませることはできない」という話がある。

また，新人看護師の多くは青年期にあり，柔軟な発想や創造性，素晴らしい適応能力を持っている。私はそれをスポンジに例えて，吸収能力も抜群であり，柔らかいからどんな器の形にも変化し，可塑性があるから基の形にもなり得る存在である。ただし，あふれるほどの水を吸収させようと思っても限界があり，大きな器に当てはめようと思っても無理があるように，一度に多くの内容を教えたり，早く成長することを期待してはいけない。また，一人ひとりの看護師が違った形のスポンジなので，その特徴を充分把握して指導すること，そして今必要なことをタイミングよく教えることが重要である。

Ⅱ．根拠を明らかにし，相手が納得するまで関わる

専門的知識や技術を理解してもらうためには，まず指導者がその背景や意義を相手が納得できるように説明する能力が欠かせない。説明は何をどのように実施するのかだけでなく，どんな時にどんな理由でどのように実施すればよいかを伝えることが相手を説得させることにつながる。ただ方法だけを説明されるよりも，その根拠を明らかにし背景や意義が理解できれば，的確な知識として得ることができるだろう。情報は受け手に伝わってこそ役に立つといえる。

Ⅲ．指導者はよきモデル，よき助言者になる

國眼眞理子ら[2]は，「看護職の年代別の職業生活の見通しで，20歳代は30～40歳代に比べると，職業生活の展望が大変短く，『半年先も見通せない』『半年ぐらい先までなら見通せる』とする人を含めて将来が見通せるのは『1年くらい先』までとする人が7割を占めた。ところが30歳

では『1年くらい先』までが40%となり，40歳では『5～10年先』が見通せる人は7割を占めるようになる」と報告している。このように新人看護師は，自分の将来について見通しが立たず，不安になる。また，看護師として働きはじめると患者さんやその家族との関わりを通して，生き方や働き方をどのようにすることが自分らしいことなのか，自分を生かすことなのかを真剣に考えることが多くなってくる。そんな時，新人看護師はモデルを積極的に求めることになるので，指導者は自らよきモデル，よき助言者になってほしい。

Ⅳ．自律した看護師を育てよう

新人看護師の指導のゴールは，ひとりの看護師として自律できることを目指すことだと考える。自律とはどんなに困難にぶつかっても決して人の手を借りず，すべて自分で判断して自分だけで実践することではなく，適切な人に依頼して協力を求めながら物事を解決していくことだと思う。困難にぶつかった時に，何を，どのように，誰に，いつ，どんな方法で協力してもらうのか，を考えられる看護師に育ててほしい。

Ⅴ．看護に情熱をもち，指導することに喜びを感じる

指導者自身が看護に情熱をもって，指導することに喜びを感じられなければ，指導を受ける側によい影響を与えない。まして，指導する人も楽しく，自信をもって指導ができないと思う。指導者は力を抜いて，自分の持ち味を生かしながら，新人看護師に関わってほしい。

最後に，相手の能力は見えないけれども確かにあることの重みや深さを見通すことが大切であることを教えてくれた，私の教育の礎となっている金子みすゞの詩を述べて終わりにしたい。

星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく，
海の小石のそのように，
夜がくるまで沈んでる，
昼のお星は眼にみえぬ。
　　見えぬけれどもあるんだよ，
　　見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぽぽの，
瓦のすきに，だ アまって，
春のくるまでかくれてる，
つよいその根は眼にみえぬ。
　　見えぬけれどもあるんだよ，
　　見えぬものでもあるんだよ。

引用文献

1) 佐藤学(2000)「学び」から逃避する子どもたち．岩波書店，東京，54-57.
2) 國眼眞理子，他(1993)女性のライフサイクルに関する研究(X)．日本教育心理学会第35回大会発表論文集：332.